

# The Impact of Freshman Orientation on Student's Learning : Validation of the Educational Effects Scale

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古田, 雅明, 本田, 周二, 八城, 薫, 堀, 洋元, 香月, 菜々子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6391">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6391</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 新入生オリエンテーションから始まるキャンパスライフと専門的学び —— 教育効果尺度の作成 ——

### The Impact of Freshman Orientation on Student's Learning: Validation of the Educational Effects Scale.

古田 雅明 \*, 本田 周二 \*, 八城 薫 \*, 堀 洋元 \*, 香月 菜々子 \*  
Masaaki FURUTA, Shuji HONDA, Kaoru YASHIRO, Hiromoto HORI and Nanako KATSUKI

#### <キーワード>

初年次教育, 新入生オリエンテーション, 教育効果

#### <要 約>

本研究では、これまでの新入生オリエンテーション時の一連の研究を踏まえ、新入生オリエンテーションの教育効果として4つの側面（「大学内の施設、大学生活の把握」「プログラムの適切な時間配分」「教職員や在学生とのつながり形成」「心理学への関心と大学への帰属意識の醸成」）を想定し、新たに教育効果尺度を作成した。2015年度と2016年度に行った新入生オリエンテーションに対する学生による評価について評価尺度の妥当性を検討した上で、学生評価の分析を行い、今後のプログラムの見直しならびに本専攻の初年次教育の今後の在り方を検討した。

新入生170名を対象として、新入生オリエンテーションに関する評価尺度14項目について確認的因子分析を行った結果、本モデルの適合度は、GFI = .916, AGFI = .876, CFI = .952, RMSEA = .059であり、概ね適合度の高いモデルであると判断できた。下位尺度は「大学内の施設、大学生活の把握 ( $\alpha = .67$ )」「教職員や在学生とのつながり形成 ( $\alpha = .75$ )」「プログラムの適切な時間配分 ( $\alpha = .82$ )」「心理学への関心と大学への帰属意識の醸成 ( $\alpha = .72$ )」であり、信頼性も一定程度高いものと判断できた。以上により、本研究において信頼性、妥当性の高い新入生オリエンテーションにおける教育効果尺度であることが確認された。

## 1. 問題と目的

### (1) 初年次教育の重要性

専門教育への期待を抱いて入学した新生を、高等学校とは大きく異なる大学での学習環境にスムーズに移行させるための高大接続が重視されるようになって久しい。これと関連して、高等教育のユニバーサル化の進行があり、多様な学生が大学に進学するようになったことが挙げられよう。大学側には、学習面や高等教育への動機づけの面で多様性に富む新生たちをスムーズに大学教育へと移行させると共に、専門教育を経た学生の卒業時の質保証をも求められるなど、いわばスタートからゴールまで、所属学生への手厚い教育支援が求められている。その際には、学習面での適応のみならず、対人関係面や情緒面での適応へのサポートも必要であることは論を待たない。

このような大学を取り巻く環境の変化に伴い、入学した学生を大学教育に適応させ、中退などの挫折を防ぎ、成功に水路づける上で初年次教育が効果的であるという期待や評価が高まっている<sup>1)</sup>。

我が国では2000年頃より、初年次教育が導入されるようになり、具体的プログラムとして多くの大学において、1) 新生オリエンテーション、2) 教養セミナー等の取り組み（大妻女子大学では基礎セミナー）、3) 支援環境の充実（学生相談室の設置や学生の居場所づくりとしての施設の整備等）といった取り組みが行われている<sup>2)</sup>。

そして大妻女子大学では、全学的な初年次教育の取り組みとして1年前期に大妻教養講座を開講し、本学の沿革や学祖の教育理念、専門の学びの魅力や大学生活の過ごし方なども含めて教育している。それに加えて、各学部や各専攻の単位でも、それぞれの理念を活かした初年次教育のプログラムを実施してきた。次に我々社会・臨床心理学専攻における初年次教育の取り組みについて概観する。

### (2) 社会・臨床心理学専攻における初年次教育の取り組み

社会・臨床心理学専攻（以下、本専攻）は、社会心理学と臨床心理学をバランスよく学ぶことを

目的とし、基幹科目は複数名の専任教員によるチームティーチング体制を取りつつ、少人数制のグループ学習を中心とした積み上げ型カリキュラムによる心理学教育を行って来た。そのために、新生オリエンテーションは、グループ学習への移行と教務ガイダンスを兼ねた宿泊型のオリエンテーションを入学直後に実施してきた。そして、1年次前期に開講の社会・臨床心理学基礎セミナーⅠでは、臨床心理学を専門とする専任教員が人間関係づくりのためのグループワークや自己表現のワークを中心として対人関係面や情緒面へのサポートを行い、後期に開講の社会・臨床心理学基礎セミナーⅡでは社会心理学を専門とする専任教員が、メディアリテラシーやレポートのスキルなどを、心理学を題材にしながら教育する体制を取ってきた。これら基礎セミナーに加えて、1年生にとって初めての専門科目であるところの心理学概論や社会心理学概論を通じて、心理学への関心の掘り起こしと、2年次以降の本格的な専門教育に向けた基礎学力作りといった学習面での適応のサポートを行ってきた。とはいえ、これら必修科目を通じて1年生と関わる専任教員は全体の3分の2程度であった。そこで、3年前からは専任教員の誰もが1年生を教える機会を作るために、学部共通科目である人間関係総論Ⅱを専任教員のオムニバス形式の授業とし、それぞれの専門を2コマずつ教授する方法を開始した。それだけに留まらず、推薦合格者に向けて入学前準備学習を奨励したり、新生ガイダンス時に、統計に関するプレースメントテストを導入したりするなどの取り組みも行って来た。

このように本専攻では開設以来、新生オリエンテーション、心理学系の基礎セミナーや概論あるいは総論などを通じて新生の大学への移行をサポートし、近年では入学前準備や入学時のプレースメントテストの導入などにより学習面のサポートを強化する試みをしてきたと言えるだろう。本稿では、これら本専攻における初年次教育の中でも初動期<sup>3),4)</sup>にあたり、学生への影響力が大きいと考えられる新生オリエンテーションを取り上げる。

### (3) 本専攻の新入生オリエンテーション

新入生オリエンテーションは、いわば学内の各学部・専攻が新入生と出会う最初の機会であり、学生に対して各専攻の教育の方向性を伝える重要な場となっている。勿論、アドミッションポリシーやカリキュラムポリシーを通じて、専攻で学ぶ意味や意義、その教育方法は新入生に伝えているが、新入生の視点に立つと、ポリシーを字面ではなく、体感できる最初の機会が新入生オリエンテーションと言えるのではなからうか。そのため、プログラムの内容は各大学の個性や伝統、建学の精神を活かしつつ、新入生の特性にあわせて、オーダーメイドのプログラムを展開する必要がある<sup>3), 5), 6)</sup>。

ちなみに本専攻において、専任教員と助手が全員一同に会して行うイベントは、その後の大学生活において、3年次前期の社会・臨床心理学研究法の発表会と4年次後期の卒業論文発表会のみで

ある。学生は専任教員の授業やゼミを通じて、それぞれの専門性や教育方法などを知る機会は沢山あるものの、専攻全体を知る機会は少ない。

さて本専攻では、新入生オリエンテーションの直後に学生に質問紙調査を行い、その結果を踏まえて、PDCA サイクルに則ったプログラムの修正等を行って来た。本専攻の開設以来ほぼ10年間は、宿泊型のオリエンテーションを行って来たが、2008年頃から宿泊型オリエンテーションにおいて学生同士に自発的交流をさせるプログラムを負担に感じる者が増えてきたことや学生がどのグループに割り当てられるかによって学生の満足度に大きな差が生じるといった問題が生じるようになった。そこで2011年度から宿泊型をやめて1日だけの学内実施の形式とし、学生の自発的交流と教務ガイダンスを中心とした内容から、教員と学生の交流および学生間の交流を促進するためのグ

表1 新入生オリエンテーション・プログラムの内容（学内実施）とそのねらい

時間	内容	ねらい
10:00	学生集合, 専攻主任の挨拶, 本日のスケジュール説明	
10:05	<b>上級生紹介(全員) &amp; 内部出身者の上級生の学生生活</b> ①授業について(高校の授業との違い) ②学内の施設について(学食・図書室・L教室など) ③アルバイトについて ④多摩キャンパスの生活の楽しみ(楽しむ工夫) ④臨床の大学院を目指す人へのアドバイス	・学生生活を知る
10:25	<b>教職員自己紹介(一人3分以内, 内容は①~⑦から選択)</b> ①心理学に興味を持ったきっかけ, ②心理学以外に興味のあること, ③18歳のときに夢中だったこと, ④私の自慢, ⑤自分を動物に例えると... ⑥ストレス解消法, ⑦最近のマイブーム	・教職員を知る ・心理的距離を縮める
11:00	<b>レクリエーション1: グループ分け(約6名ずつ)</b> 一人1枚錯視カードを配布, 同じ錯視図仲間を探して集まる	・学生交流の促進 ・心理学への関心
11:15	<b>レクリエーション2: グループで自己紹介</b> 教員, 大学上級生が各グループに入って進行	・学生交流の促進
	<b>昼食(グループごとに)</b>	・交流の促進(学生, 教員, 上級生)
13:00	<b>レクリエーション3: 学内施設巡り &amp; アナグラム課題</b> 教員の関所5箇所とアナグラムAEDポイント5箇所を回る <b>&lt;教員関所での課題内容&gt;</b> ・有名な心理学者(フロイトはどの人?) ・音量測定課題(絶叫ゲーム) ・形態認知課題(何が見える?) ・時間の認知(1分間ゲーム) ・創造的思考力(創造性ゲーム) <b>&lt;アナグラム課題&gt;</b> 学内にある, AEDを探し, そこが何棟かを答えて単語を獲得する。AEDがあった場所を地図に記入。	・交流の促進(学生, 教員, 上級生) ・心理学への関心と帰属を高める ・学内の位置把握
14:00	レクリエーション終了 & 集合 教員関所課題の解説 & 結果発表	・心理学への関心と帰属を高める
14:45	記念撮影, 解散	

ループレクリエーション活動を中心とした内容へと、プログラムを抜本的に見直した<sup>7)</sup>。

その結果、プログラムに必須の条件として、1) 円滑な交流ができるようなグループワーク、2) 心理学への関心と専攻への所属感を高めること、3) 教職員や上級生との心理的距離を縮めること、4) 大学内の施設を知ること、5) 詰め込みすぎない時間配分の5点を見出し2012年度から新しいプログラムを実施した(表1)。

特に、2)を重要な条件として位置づけ、本専攻の専門分野である心理学への関心と所属感を高めることを目的とした心理学専攻ならではの特有のオリエンテーリング式プログラムを準備している。具体的には、学生食堂や臨床心理実習施設など学内で学生にとって重要な場所に「関所」を設けて、専任教員が「関所」において、各人の専門性を活かした課題(例えば、心理学の歴史や形態認知の課題や創造的思考の課題など)を出すプログラムである。これを核におきつつ、他の1)から5)の条件を満たすために、新生を6名程度の小グループに分け、学内施設におかれた複数の「関所」を回り、専任教員の出す心理学の課題にグループで取り組みながら行うチーム対抗のオリエンテーリングが、メインプログラムになる。これにより学生同士が知り合いになり、専任教員と交流し、心理学に触れつつ、学内施設を知ってもらうという狙いがあった。

さらに、これらの新しいプログラムに対する学生の評価を検討し<sup>8),9)</sup>1)グループで競わせるゲーム形式のレクリエーションを織り交ぜることが、学生たちの自発的な交流につながったこと、2)大学の施設全体を巡るレクリエーションが、大学生活に慣れていく一助になると考えられること、3)入学時のより早い時期に行うことが望ましいことなどを挙げ、新生オリエンテーションの後の授業においても、つながりを持ったプログラムが必要と考えられることを考察した。そして、PDCAサイクルに則り、毎年、新生オリエンテーション実施後に学生にアンケート調査への協力を依頼し、プログラムの評価を行いつつ、教育効果を測定する項目の精緻化を試みると同時に、プロ

グラムの微調整を行ってきた。

#### (4) 目的

本研究では2015年度と2016年度に行った新生オリエンテーションに対する学生による評価について、教育効果尺度の信頼性と妥当性を検討した上で、学生評価の分析を行うことで、今後のプログラムの見直しならびに、本専攻の初年次教育の今後のあり方を検討することを目的とする。

## 2. 方法

分析対象：本調査では、2015年度および2016年度に実施された新生アンケートに関して分析を行う。具体的には、2015年度(88名)、2016年度(89名)の回答のうち、回答の不備等の理由により7名を分析から除外した計170名(96.0%)を分析の対象とした。

調査時期：2015年度、2016年度ともに新生オリエンテーション直後の、必修授業の初回ガイダンス時に実施した。

#### 調査内容：

1) フェイスシート：クラス、学籍番号、名前、居住形態(自宅、寮、一人暮らし、その他)、通学時間についてたずねた。なお、学籍番号や名前などの個人を特定できる項目については、分析に使用していない。

2) 新生オリエンテーションに関する評価：新生オリエンテーションに参加したことに対する評価(効果)についてたずねるものである。これまでの新生オリエンテーション時のアンケート結果を踏まえ、新生オリエンテーションの教育効果として4つの側面(「大学内の施設、大学生生活の把握」「プログラムの適切な時間配分」「教職員や在学生とのつながり形成」「心理学への関心と大学への帰属意識の醸成」)を想定し、新たに項目を作成した。全15項目に関して、「1. あてはまらない」から「4. あてはまる」の4件法で回答を求めた。

3) 新生オリエンテーションの良かった点：新生オリエンテーションの良かった点について自

由記述にて回答を求めた。

4) 新入生オリエンテーションの改善点・アイデア: 次年度プログラムの改善に向けて, 新入生オリエンテーションの改善点や良いアイデアについて自由記述にて回答を求めた。

### 3. 結果

#### (1) 居住形態, 通学時間について

調査対象者の居住形態, 通学時間の結果について表2, 3に示す。自宅から通っている学生が半数以上であり, 通学時間が1時間半以上かかっている学生も同様に半数いるというのが本専攻の特徴である。

#### (2) 新入生オリエンテーションに関する評価(効果)について

新規に作成した新入生オリエンテーションに関

する評価について2015年度, 2016年度の平均値と標準偏差を表4に示す。

次に, 今回作成した尺度の因子構造が妥当であるかを検討するために, 事前に想定していた因子構造モデル(4因子)について確認的因子分析を行った。その結果, 「先輩と直接話すことができた」という項目のみ有意な関連が見られなかったため, その項目を削除し, 再度, 確認的因子分析を行った(図1)。本モデルの適合度は, GFI = .916, AGFI = .876, CFI = .952, RMSEA = .059であり, 概ね適合度の高いモデルであると判断できる。また, 4因子について $\alpha$ 係数を算出したところ, 「第1因子: 大学内の施設, 大学生生活の把握 ( $\alpha = .67$ )」 「第2因子: 教職員や在学生とのつながり形成 ( $\alpha = .75$ )」 「第3因子: プログラムの適切な時間配分 ( $\alpha = .82$ )」 「第4因子: 心理学への関心と大学への帰属意識の醸成 ( $\alpha = .72$ )」であり, 信頼性も一定程度高いものと判断できる。以上により, 本研究

表2 居住形態

	度数	%
自宅	97	(57.0)
寮	17	(10.0)
一人暮らし	45	(26.5)
その他	11	(6.5)

表3 通学時間

	度数	%
30分以内	33	(19.4)
30分~1時間	59	(34.7)
1時間半~2時間	66	(38.8)
2時間以上	12	(7.1)

表4 新入生オリエンテーションに関する評価(年度別)

		2015年度		2016年度	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
第1因子 大学内の施設, 大学生生活の把握	項目1: 大学構内の全体が把握できた	2.91	(0.69)	2.95	(0.82)
	項目2: 大学内の施設について知ることができた	3.07	(0.56)	3.09	(0.63)
	項目3: 先輩の話で, 大学生生活の様子をだいたい知ることができた	2.95	(0.74)	3.01	(0.76)
第2因子 教職員や在学生 とのつながり形成	項目4: 同級生に気軽に声をかけることができるようになった	2.95	(0.84)	2.79	(0.80)
	項目5: 先輩と直接話すことができた※	2.19	(1.13)	2.12	(1.20)
	項目6: 教職員に親しみを感じる事ができた	3.19	(0.66)	3.12	(0.78)
	項目7: 同級生とも上手くやっつけていけそうだ	3.27	(0.71)	3.12	(0.66)
第3因子 プログラムの 適切な時間配分	項目8: 先輩の話の時間はちょうどよかった	3.35	(0.64)	3.65	(0.62)
	項目9: オリエンテーション全体の時間はちょうどよかった	3.17	(0.63)	3.28	(0.77)
	項目10: 学内レクリエーションの時間はちょうどよかった	3.15	(0.67)	3.34	(0.67)
	項目11: 専攻教職員紹介の時間はちょうどよかった	3.32	(0.65)	3.40	(0.77)
第4因子 心理学への関心と 大学への帰属意識の醸成	項目12: 新入生オリエンテーションに満足している	3.38	(0.55)	3.39	(0.68)
	項目13: 大妻女子大学の学生になったことを実感した	3.36	(0.63)	3.56	(0.59)
	項目14: 心理学を学ぶ意欲が高まった	3.51	(0.55)	3.52	(0.65)
	項目15: 充実した学生生活が送れそうだ	3.41	(0.67)	3.34	(0.63)

※確認的因子分析の結果, 有意でなかった項目



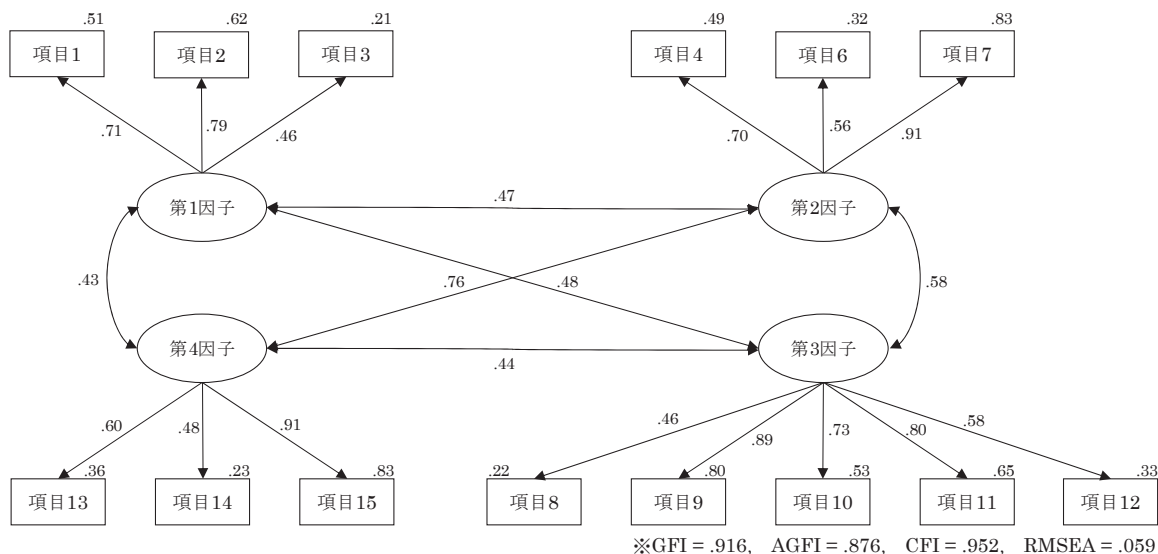


図1 確認的因子分析の結果（新入生オリエンテーションによる評価尺度）

表5 年度による尺度得点（*t*検定）

	2015年度 (n=88)		2016年度 (n=82)		<i>t</i> 値	有意確率
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
大学内の施設, 大学生生活の把握	2.98	(0.51)	3.02	(0.58)	0.46	<i>n.s.</i>
教職員や在学生とのつながり形成	3.14	(0.61)	3.01	(0.60)	1.38	<i>n.s.</i>
プログラムの適切な時間配分	3.27	(0.46)	3.41	(0.55)	1.78	<i>p</i> <.10
心理学への関心と大学への帰属意識の醸成	3.43	(0.51)	3.48	(0.49)	0.62	<i>n.s.</i>

において信頼性, 妥当性の高い新入生オリエンテーションにおける教育効果尺度を作成することができたと判断できる。

(3) 年度による得点の違いについて

新入生オリエンテーションにおける教育効果の4因子に関して年度による得点の違いが見られるかどうかを検討するために, *t*検定を行った(表5)。分析の結果, 「プログラムの適切な時間配分」に関して, 2015年度よりも2016年度の方が有意傾向ではあるが得点が高かった (*t*(168) = 1.78, *p* < .10)。それ以外の3つの下位尺度得点についても,

ほとんどが4件法(1~4)のうち, 3以上であり, 中でも, 「心理学への関心と大学への帰属意識の醸成」は3.43(2015年度), 3.48(2016年度)と非常に高い数値を示していた。本専攻が意図している効果が新入生オリエンテーションのプログラムにしっかりと反映されていることの証左であると判断できるであろう。

(4) 居住形態による得点の違いについて

新入生オリエンテーションにおける教育効果の4因子に関して学生の居住形態による得点の違いが見られるかどうかを検討するために, 分散分析

を行った(表6, 図2)。分析の結果, 条件間による有意な違いは認められなかった。そこで, 居住形態のうち, 「寮」と「一人暮らし」を新たに一つのカテゴリーとして, 「自宅」と「寮, 一人暮らし」によって新入生オリエンテーションに関する評価が異なるかどうかを検討するために,  $t$  検定を行った(表7)。分析の結果, 「教職員や在学

生とのつながり形成 ( $t(157) = 2.50, p < .05$ ) 「プログラムの適切な時間配分 ( $t(157) = 1.69, p < .10$ ) 「心理学への関心と大学への帰属意識の醸成 ( $t(157) = 2.80, p < .01$ )」に関して, 「自宅」学生よりも「寮, 一人暮らし」学生の方が有意(一部, 有意傾向)に得点が高かった。

表6 居住形態による尺度得点(分散分析)

	自宅 (n=97)		寮 (n=17)		一人暮らし(n=45)		その他 (n=11)		F値	有意確率
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
大学内の施設, 大学生生活の把握	2.95	(0.54)	3.18	(0.80)	3.00	(0.45)	3.12	(0.50)	1.28	n.s.
教職員や在生とのつながり形成	2.97	(0.66)	3.37	(0.58)	3.15	(0.46)	3.33	(0.52)		
プログラムの適切な時間配分	3.27	(0.51)	3.52	(0.42)	3.37	(0.53)	3.56	(0.45)		
心理学への関心と大学への帰属意識の醸成	3.36	(0.51)	3.75	(0.34)	3.52	(0.49)	3.55	(0.48)		

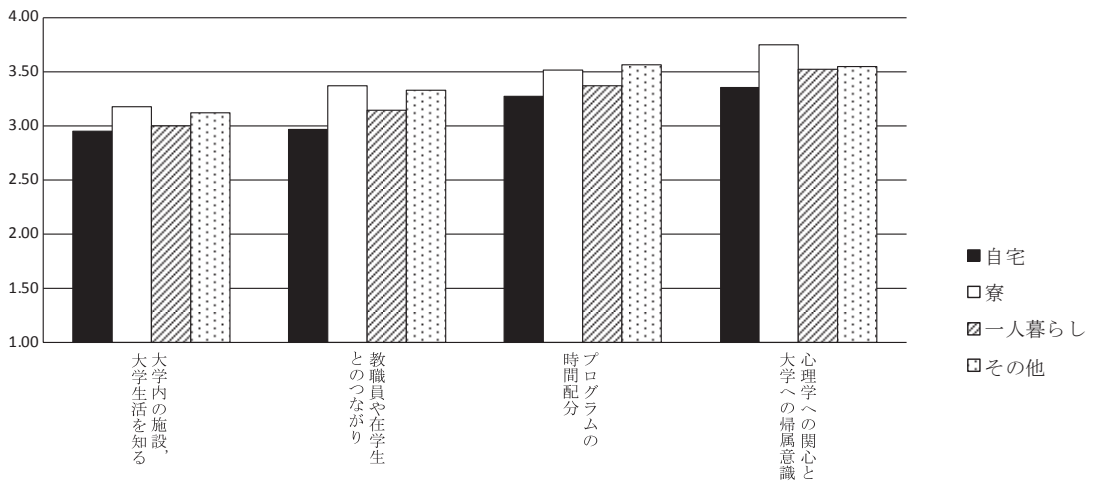


図2 居住形態による尺度得点

表7 居住形態による尺度得点 ( $t$  検定)

	自宅 (n=97)		寮, 一人暮らし (n=62)		t値	有意確率
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
大学内の施設, 大学生生活の把握	2.95	(0.54)	3.05	(0.57)	1.12	n.s.
教職員や在生とのつながり形成	2.97	(0.66)	3.21	(0.50)	2.50	$p < .05$
プログラムの適切な時間配分	3.27	(0.51)	3.41	(0.50)	1.69	$p < .10$
心理学への関心と大学への帰属意識の醸成	3.36	(0.51)	3.58	(0.46)	2.80	$p < .01$



## (5) 新入生オリエンテーションの「良かった点」と「改善点」の分析

(自由記述データ分析より)

次に、新入生オリエンテーションについて良かった点、改善すべき点を自由に記述してもらった内容を、樋口<sup>10)</sup>の開発した分析用フリーソフトウェア KH Coder を用いて分析した。分析された回答は、2015年度の良かった点の記述68件と改善点の記述30件、2016年度の良かった点の記述80件と改善点の記述82件であった。

### 1) 全体的な語の出現数

まず、自由記述における語の出現数を表8にまとめた。もっとも出現頻度の多かった語は、「話す、話、お話し、話せる」であり、会話や話に関する内容が多かったことが分かる。次に出現頻度の多かった語は、「クラス、グループ、班」や「先輩」、「同級生、友達、子」であり、学生同士の交流に関する内容が多く挙げられた。

表8 自由記述における語の出現数  
(10回以上のもの)

語	出現回数
話す、話、お話し、話せる	120
クラス、グループ、班	69
先輩	60
同級生、友達、子	57
思う	47
先生	45
オリエンテーション、レクリエーション、ゲーム	43
聞く、聞ける、知る	41
人	37
大学、学校	27
機会	27
時間	24
もう少し、少し	21
出来る	21
紹介	15
食べる	12
生活	12
自己	12
感じる	11
楽しい	10
直接	10

### 2) 新入生オリエンテーションの良かった点と改善点—対応分析・共起ネットワークより

2015年度・2016年度の良かった点、改善点の

特徴を語の出現パターンから探るため、2015年度・2016年度の良かった点、改善点すべてを含めて対応分析を行った(図3)。その結果、第1成分のプラスの方向には改善点についての回答、マイナスの方向には良かった点が布置されていることから、第1成分は良かった点と改善点を分ける軸と解釈された。なお第1成分の説明率(%)は50.18%であった。良かった点については、2015年度・2016年度ともに原点付近に布置されており、語として出現数の多かった内容(表8)は良かった点について述べられたものであることが分かった。良かった点は年度によってそれほど大きな違いはないが、図3原点付近の布置を少し詳細にみると、2015年度は「子」「班」「先生」「面白い」「直接」といった特に同級生、先輩、先生と直接交流できたことが中心に語られ、2016年度はそれに加えてゲームのことや学内のことなどプログラムの内容についても言及していることが分かった。

一方、改善点については、2016年度が第1象限、2015年度が第4象限に布置され、改善点は年度によって内容が異なった。2015年度の改善点は「新入生」「アドバイス」「内容」に関するものと、「授業」「登録」に関する2つに分けられた。2016年度の改善点の領域には、「雨」「昼食」「時間」「担当」などが布置されており、当日の環境やそれに伴って生じるプログラムの内容に対する語が挙げられていた。

さらに同時に発現することの多かった語を抽出してその出現パターンを探る共起ネットワークを用いた分析も実施した(図4)。出現数の多い語ほど大きい円で描画され、同時に発現することの多い語(共起関係)ほど太い線で描画されている。

図4を見ると、年度にかかわらず、また良かった点、改善点の全てに共起関係がみられたのが「先輩」「良い」「思う」であり、先輩との交流は重要な要素であることが分かった。次に良かった点に注目すると、2015年度・2016年度の両方で共起していたのが「話す」「機会」「先輩」「先生」「子」「友達」「人」であり、先輩、同級生、先生と話す機会があった点(つながり形成の場)が良かった点として多く挙げられたことが分かる。加えて





を作成した。確認的因子分析の結果、適合度が高いことが示され、本尺度の信頼性、妥当性が実証された。今後、項目を改定する余地は残されているが、新入生オリエンテーションの教育効果を適切に評価することのできる尺度を作成することができたことは有益であったと考えられる。

## (2) 「年度」「居住形態」ごとの新入生オリエンテーションの評価

次に、本尺度を用い、年度による違い、居住形態による違いについて検討を行った。年度による違いとしては、そこまで大きな違いは認められなかったが、ほとんどの下位尺度得点が4件法(1~4)のうち、3以上であり、新入生にとって本専攻が実施しているオリエンテーションの効果は高いと判断することが可能であろう。居住形態による違いについては、いくつかの違いが認められた。「教職員や在学生とのつながり形成」「心理学への関心と大学への帰属意識の醸成」に関して、自宅学生よりも寮や一人暮らしの学生の方が有意に得点が高かった。また、有意ではなかったが、寮の学生が上記の2つの下位尺度得点に関しては最も得点が高いことが示されていた。関東近郊に住み、自宅から大学へ通う学生と、大学入学を契機として自宅を離れて大学に通う学生では入学時における大学に対する考えや期待・不安が異なる可能性があるのではないだろうか。初年次における学生に対するサポートの観点の一つとして居住形態を考慮に入れることが有用であるのかもしれない。この点については、今後も注目していく必要があると考えられる。

## (3) 今後の新入生オリエンテーションに向けて

新入生オリエンテーションのプログラムに対する評価を、自由記述による回答からも検討した。その結果、良かった点として主に書かれていた内容は、同級生、先輩、先生と話せたことであり、「教職員や在学生とのつながり形成」の機会の提供が新入生から肯定的評価を得ていることが示唆された。このつながりの場という視点は、改善すべき点においてもポイントとなっており、「もう少し

新入生同士の自己紹介の時間が欲しい」というプログラムの内容と時間配分についての要望も多かった。当専攻のプログラムでもレクリエーションをする際のグループ内では自己紹介をしているが、クラスのサイズとオリエンテーションに与えられた時間を考えるとクラス全員と知り合う機会を提供するのは難しい。新入生オリエンテーションはあくまでもつながり形成の最初のきっかけづくりという位置づけであり、そこから先のつながり形成は、基礎セミナーなどのグループワークを通して可能となっていくことが期待される。

その他、改善すべき点には「実施時期の問題」「天候を考慮したプログラム」が挙げられた。実施時期に関しては、先輩からの履修登録に関する情報が有益だったにもかかわらず、オリエンテーションの日に履修登録はすでに終わっている、という問題である。履修に関する先輩からのアドバイスはもっと早い時期に、その機会があると良さそうである。これは履修ガイダンスの改善点にもつながるであろう。

2016年度のオリエンテーションは、雨の中でのレクリエーションとなり、そのことが問題として挙げられた。レクリエーションの趣旨の一つが「学内の配置や施設を知る」ことであるため、屋外でのゲームは雨天時用に変更して屋内で実施したが、学内の各棟を巡るために外の濡れた狭い回廊をグループで歩くことになった。このため、「雨天時に不向きなレクだ」という指摘が少なくなかった。雨天時のプログラムの工夫が求められる。

## (4) 研究の限界と今後の課題

本研究は、社会・臨床心理学専攻における初年次教育の一環として行われている新入生オリエンテーションの教育効果を検討したものであり、開発した尺度の信頼性や妥当性が確認でき、またプログラム自体の一定の教育効果を認めることができたと言えよう。心理学の専門的な学びのスタートラインとして、新入生の関心を高めると同時に専攻への所属感をも高められた点で、少なくともこの2年間のプログラムの意義を確認できた。しかしながら、本プログラムは初動期の特別なプロ

グラムであり、たとえばこれら心理学への関心や所属感がどれほどの長期的効果を持ちうるかについては今後も継続的に検討していく必要があるだろう。いわば祭りの一過性の高揚感に留まっているのか、その後の持続的な学習意欲へとつながる移行としての意義を持ちうるのかといった課題である。また、心理学を専門とする教員によるプログラムが、果たして本学以外の心理学を専門とする新生にとって有効であるのか、その教育効果の普遍性についても検討する必要がある。

公認心理師資格取得のためのカリキュラムが近い将来導入される可能性が高いことや、18歳人口の減少などにより大学で心理学を教える環境の大きな変動が予想される中で、本専攻における初年次教育の検討はまだ緒についたばかりであり、多様化する新生の大学適応を支えるためにも今後の継続的な検討が求められている。

## 謝辞

本調査にご協力くださった新生の皆様へ感謝申し上げます。本調査の集計にあたり、本学大学院臨床心理学専攻の大学院生の皆様にご協力いただきました。また新生オリエンテーションの運営に携わって下さった学部生の皆さん、そして歴代の教職員の皆様へ記して感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 初年次教育学会 (2007). 設立趣意書 <http://www.jafye.org/society/prospectus/> (2016/11/1)
- 2) 中央教育審議会 (2008). 学士課程教育の構築に向けて (答申)
- 3) 宮原久実・伊藤昇・谷中晃・村田陽一 (2009). 学生参画のリアシュア Reassure 型オリエンテーションプログラムの開発, 大学行政研究, 4, 65-78.
- 4) セーラ・ルイーザ・バーチュリ・大村恵子・鈴木義也・澁谷智久 (2010). 新生オリエンテーションの展開ー包括的プログラムの構築の試みー, 東洋学園大学紀要, 18, 221-246.
- 5) 石倉健二・高島恭子・原田奈津子・山岸利次 (2008). ユニバーサル段階の大学における初年次教育の現状と課題, 長崎国際大学論叢, 8, 167-177.
- 6) 栗田充治 (2001). 学生と創る新生オリエンテーション, 大学と学生, 440, 27-32.
- 7) 古田雅明・中村紘子・香月菜々子・加藤美智子・田中優・西河正行・福島哲夫・堀洋元・向井敦子・八城薫 (2013). 新生オリエンテーションに対する学生による評価の分析, 大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究, 14, 59-70.
- 8) 八城薫・古田雅明・香月菜々子・加藤美智子・神庭直子・田中優・千田紗織・西河正行・福島哲夫・堀洋元・向井敦子 (2013). 新生オリエンテーション・プログラムの作成とその効果ー新生の円滑な大学適応を目指してー, 日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 1103.
- 9) 八城薫 (2014). キャンパスにおけるつながりで不適応を防ぐー研究と実践ー日本心理学会第 78 回大会公募シンポジウム SS-021 (話題提供)
- 10) 樋口耕一 (2004). テキスト型データの計量的分析ー2つのアプローチの峻別と統合, 方法と理論, 19 (1), 101-115.